

秋田県千畑村にみる都市計画

—— ハワード田園都市との比較 ——

秋田大学 正会員 清水浩志郎
秋田高専 正会員 折田 仁典
岩手県 正会員 本木 正直
秋田大学 学生員 林 達夫

SAKAMOTO'S VILLAGE-PLAN IN SENHATA-MURA, AKITA PREFECTURE

BY KOSHIRO SHIMIZU
JINSUKE ORITA
MASANAO MOTOKI
TATSUO HAYASHI

(概要)

秋田県仙北郡千畑村の豪農坂本理一郎(東嶽)(文久元年(1861年)~大正6年(1917年))は、明治35年(1902年)頃から千屋地区で耕地整理をはじめ道路整備、役場、学校、郵便局の移転などを計画的に行ない新しい村づくり事業を開始した。その土地利用の基本形態は、中心地区に行政機能などを集中させ、そこから松・杉・桜並木の放射状の6本の道路で各地区を分割している。坂本が独自の発想で村づくり事業を開始したほぼ同時期に、英国においてエベニザ・ハワード(1850~1928年)が田園都市論(1898年)を発表した。

本報告は、坂本による千屋地区の村づくりとハワードの田園都市計画との類似点に注目し、両者の計画を歴史的背景等から比較・検討したものである。

(都市計画・農村計画)

1. 千畑村の現況

千畑村は、秋田県仙北平野の東に位置し、村の東部一帯は奥羽山脈の山麓地帯にあり、海拔1000m前後の山嶺を境に岩手県に接している。(図-1)

この山地は三段の活段層からなる傾動した地塊を示し、とくに盆地床に接する最下位の天狗山丘陵は逆傾斜となっている。また、村の西部千屋地区の中央部は、奥羽山脈に源を発する丸子川、真昼川の複合扇状地であったため、田沢疎水事業(第一次650ha昭和33年完工、第二次280ha昭和43年完工)により開田される以前は原野・林地としての利用にとどまっていた¹⁾。

昭和30年(1955年)町村合併促進法により、千屋村と畑屋村が合併し、現在の千畑村が誕生した。村の総面積は86.33km²である。

千畑村の人口は、昭和15年から25年の10年間に約2500人増え、昭和30年には約12,400人にまで達した。しかし、その後の20年間に約3000人減少し、昭和58年現在の人口は9269人である。(表-1)²⁾ 就業人

図-1 千畑村の位置

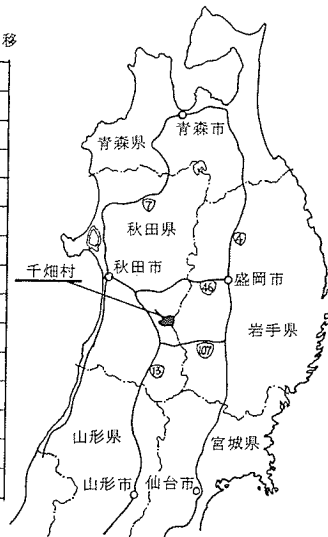


表-1 千畑村の人口推移

年次	総数(人)
大正9年	8394
14年	8599
昭和5年	9139
10年	9464
15年	9697
20年	11221
25年	12263
30年	12375
35年	10909
40年	9954
45年	9589
50年	9239
55年	9242
58年	9269

口の構造は、第1次産業51.4%、第2次産業23.8%、第3次産業24.8%と第1次産業の就業者の割合が高い。また、昭和55年の資料によれば、農家人口比率（農家人口／総人口）は86.6%と秋田県内69市町村中最高³⁾。

従来、冬季の副業としてわら加工等が行なわれていたが、農作業の変容と高度経済成長による労働力不足から、農家の出かせぎ者が急増し、昭和49年には1665人にまでのぼった。59年現在でも、全人口の約11%にあたる約1000人が出かせぎ者である。

2. 坂本理一郎による村づくり

坂本理一郎は、文久元年（1861年）千畑村千屋小森に生まれた。10才から六郷の熊谷松陰に皇学を学び、16才のとき上京、根本通明から経書を習い、また中村敏字の同人社で英語や洋学を、津田仙に農学を学んだ。さらに、福沢諭吉の慶応義塾に入学し、20才で郷里に帰り、千屋簡易学校の教師になった。坂本は帰村後、集落内の若者に働きかけ夜学をおこしたり、明治27年（1894年）には千屋青年会を組織し、夜間や農閑期を利用し討論会や演説会、さらに著名な学者や老農を招いての講演会などにより、教育による村づくりを行なう^{4~6)}。明治35年（1902年）頃から、耕地整理をはじめ道路整備、役場学校の移転など、計画的な村づくりを開始した。以下、坂本による村づくりについてその概略を述べる。なお、資料としては、文末の文献を参考にしたが、一部現地ヒアリング調査も実施した。

(1) 歴史的背景

坂本が村づくりを考えた背景は大きく分けて、ふたつあったと思われる。ひとつは、千屋村内各集落間の相互関係の確立であった。すなわち、明治22年（1889年）以前の各集落は、図-2に示すように、川口―黒沢―元本堂、板見内―本堂、弘田―土崎、安城寺―小荒川―千屋間がそれぞれ相互依存の関係にあったが、明治22年の町村合併により、川口、板見内、弘田、安城寺の各集落が、千屋村から切り離され、その結果、千屋村内の各集落を再編成する必要があったこと。もうひとつは、農家の安定生活を図る良質米の作付の問題である。明治初期の秋田米は貯蔵に不適で、「秋田の腐れ米」と呼ばれて不評をかっていた。そのため、地主達は積極的に米の改良の推進に務め、秋田県でも農談会を設置し明治11年（1878年）には種子交換会が開催され、明治29年（1896年）には7郡47町村にわたって適産調べが実施されるなど、県全体に、農事技術の発達や土地改良による農家経済の安定を図る気運が高まっていた。千屋村でも良質米への改良作付が大きな課題となっており、そのためには耕地整理が必要であった。

(2) 思想

このような背景の下に坂本理一郎は、分断された各集落をひとつの村としてまとめるためには中心地が必要であるが、現在の各集落では勢力が均衡していることと、地形的な面から既存の集落ではいずれも中核とはなり得ないと判断した。そこで坂本は

図-2 明治22年以前の千屋地区周辺概略

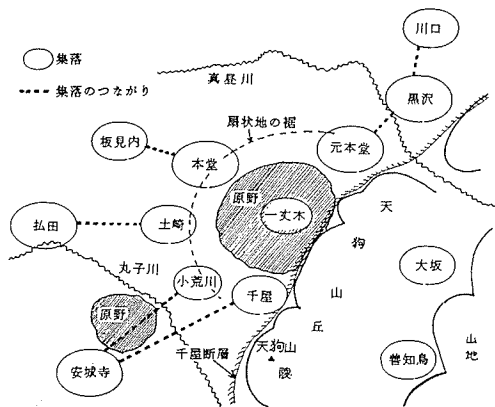
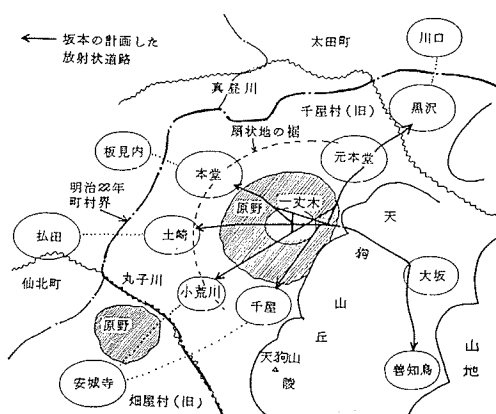


図-3 明治22年以降の千屋地区周辺概略



各集落のちょうど真中に位置する一丈木地区を、乏水性の原野のまったなかであつたが中心地として選択した²⁾。(図-3)

坂本は、自村に限らず、全郡全県にわたって貧困農家の多いことを嘆き、農民の豊かさを求めて農事改良に力を注いだ。とくに、彼は水田の稲作改良に力を入れ、乾田馬耕法をとり入れた。馬耕するには、水田を乾田にすること、なるべく広い大きな田にすること、用排水の溝を完備するなど、そのためには耕地整理が必要であつた。千屋村の小荒川地区にある自分の小作の土地で試験的に耕地整理を行なうこととし、心配する小作民に対して「もし米がとれなかったときは、小作米は一粒もいらぬし不足分は補償する」と言いきって実行した。この断行は好結果をうみ、米の収穫を3割〜5割増加させ、また農作業の労力も減少したことから、他の集落や村でも開始された。

また、村の環境づくりのひとつとして松・杉・桜並木を、中心地の一丈木から各集落を結ぶ6本の道路に配し、計画的に緑豊かな村にしようとした。道路計画は、当初から計画的に配列し、建設したのではなく、耕地整理をする際に、並木を植え、並木と並木の間が自然に道となるようにしたものであ

る。道路幅員も45〜8mと当時としては不必要なほど広く、さらに道路と並木の間に約40cmの側溝が作られており、いままのままの状態で利用されている。

こうした、一丈木の開発、耕地整理、道路建設等の坂本の村づくりには、かなりの額にのぼる坂本家の私財が投入された。

(3)建設計画

現在、坂本が行なつた村づくりの計画書は全く残つておらず、坂本がどのように村づくりを行なつたかはわからない。そこで、彼が実施した事業の継続を時系列でみてみると、まず耕地整理事業は、明治35年(1902年)小荒川地区で試験的に実施したのを初め、明治42年(1907年)千屋地区、大正3年(1914年)土崎地区で実施している。

坂本による村づくりの第1の目的は、前述したように乾田馬耕法導入による農事改良による農家経営の安定を図ることにあつた。そのためには、大規模な耕地整理事業を実施せねばならず、必然的に、村内の核(中心地)を明確にすることと、各集落が有機的なつながりを持つことが必要となつた。彼は一丈木を新しい村の核と考え、明治44年(1911年)には、同地区の原野に千屋村役場を建設し、次いで翌年、千屋小学校をその隣に移転した³⁾。この中心地と各集落を松・杉・桜並木を配した道路で結んだこれは、集落間の勢力争いを考えたものであるとされており、坂本が自由民権運動に活躍していたことから、民主主義の立場を各集落間に組み入れようとしたとも思われる。

同地区は乏水性の扇状地にあつたため、水の供給に、役場は堀ぬき井戸で、小学校は遠く離れた向野からポンプ水にたよるなど不便であつた。坂本は大正6年(1917年)57才で没したが、その後も、耕地整理、一丈木の開発は行なわれ、大生8年(1919年)本堂地区、昭和にはいって元本堂地区が整理され、警察、郵便局なども一丈木に移され、昭和の初めには、水道もひかれ、住民も増加した。一丈木地区の概略を図-4に示した。大正14年(1939年)千屋小学校の火災後、再建に並木道の杉や松を利用するなどしたためであろうか、坂本の残した並木道は、現在原形をとどめていない所が多い。

こうした坂本理一郎の村づくりが開始されたのとはほぼ同時期の1898年、英国においてエベニザ・ハワードが田園都市論を提唱し、大きな反響を呼んだ。坂本とハワードのまちづくりの理念においてはかな

年 次	坂本理一郎と一丈木開発
1861(文久元年)	千屋村小森で坂本理一郎誕生
1889(明治22年)	町村合併(図-3)
1894(明治27年)	坂本、衆議院議員に当選 〃、千屋青年会会長
1897(明治30年)	坂本、千屋村農会長
1900(明治33年)	坂本、仙北郡農会副会長
1902(明治35年)	小荒川地区で耕地整理事業開始(45ha)
1904(明治37年)	坂本、貴族院議員に当選
1908(明治41年)	坂本、仙北郡農会長
1910(明治43年)	千屋地区で耕地整理事業開始(204ha)
1911(明治44年)	役場を一丈木へ移転
1912(大正元年)	小学校を一丈木へ移転
1915(大正3年)	土崎地区で耕地整理事業開始(238ha) 本堂地区で 〃 (230ha)
1918(大正6年)	坂本、静岡県葦山で死亡
1928(昭和3年)	産業組合を一丈木に建設
1931(昭和6年)	元本堂地区で耕地整理事業開始(112ha)
1955(昭和30年)	畑屋村と千屋村が合併し千畑村となる

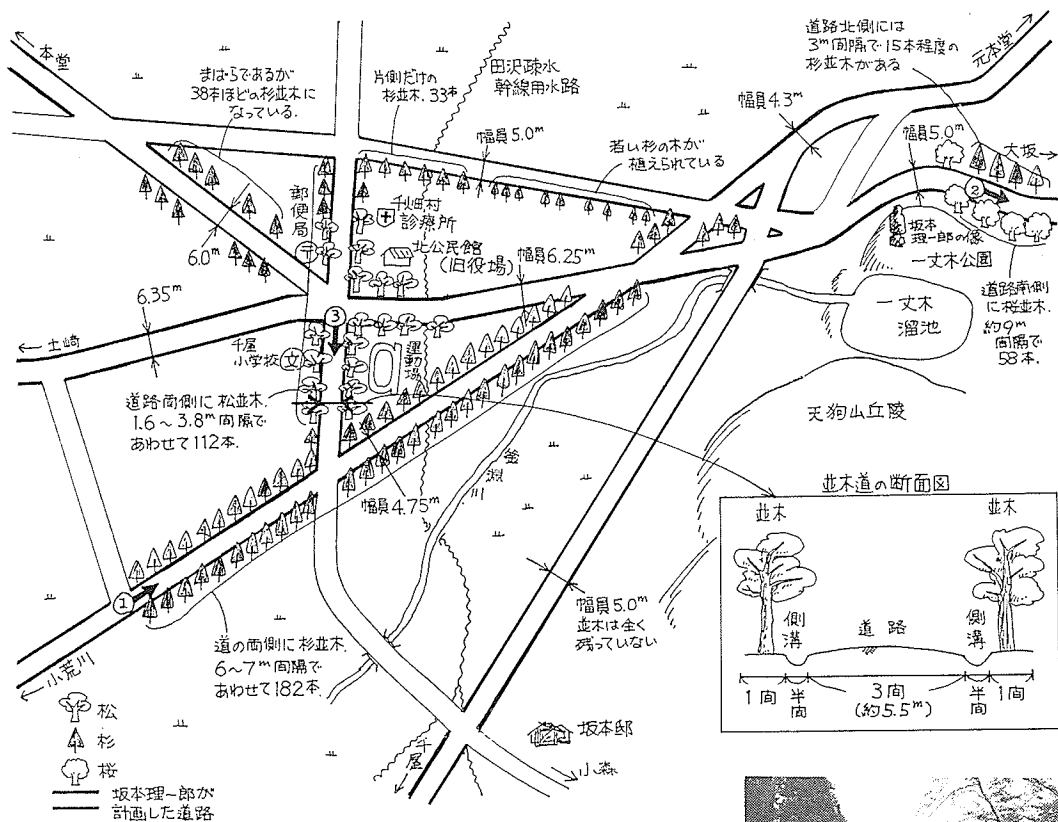


図-4 現在の一丈木地区

写真-1 ①からみた杉並木道

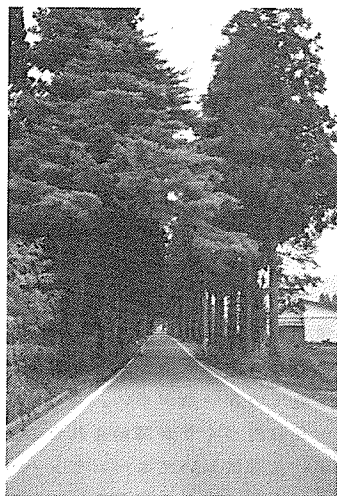


写真-2 ②からみた 杉・桧並木道

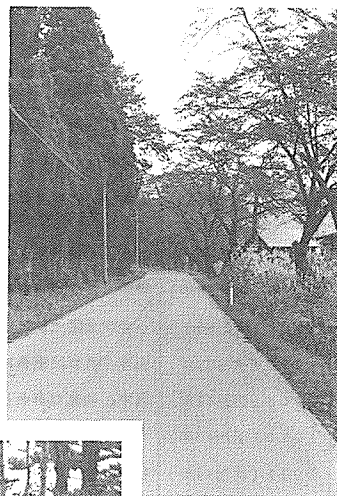
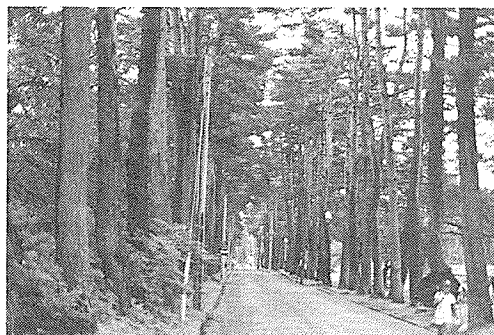


写真-3 ③からみた松並木道



り類似している点があることに注目し、その比較・検討を次章で行ないたい。

3. ハワードの田園都市と坂本の村づくり

イギリスのニュータウンづくりに大きな影響を与えたエベニザ・ハワードは、明治35年(1902年)「明日の田園都市」を刊行した。ハワードの田園都市論については、すでに我国ではいくどとなく解説されているが、ここでは坂本の計画理念と比較するため、簡単にその概略を述べたい。

英国では産業革命後の、農村の過疎化、都市の過密、とくに都市部における住宅環境の著しい劣悪化などの社会問題に直面していた。ハワードは、既存の農村や都市を改造する再開発ではなく、農村と都市の主要な利点(魅力)を融合した田園都市をつくることで対処しようとした。レイアウトは、①6000エーカーの土地の中央に広場状の庭園を置き、②その中央から放射状に6本の並木道をめぐらし、町を6つの区に分ける。③中心の庭園に面して、市役所、公会堂、図書館、病院などの公共施設を建設し、④その外側から幅300ヤード、中心から440ヤードまでの範囲に中央公園を設置する。⑤その外側に路線的商店街、⑥さらにその外側に「広大な並木道」(Grand Avenue)を挟んで住宅街を配置し、Grand Avenueのなかに小学校と教会を置く。⑦その住宅街の外側にあらゆる種類の工場を配し、その外を牧場や畑などの田園によって取り囲ませる。⑧田園都市と母都市との間を鉄道で連結させる。

⑨資金面では、土地買収費、都市建設費などのすべての費用において、借地人としての住民の払う地代という形の共同出資とし、細かく歳入、歳出が示されている¹⁰⁾。(図-5)

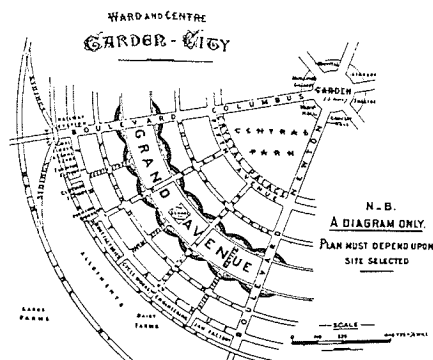
一方、坂本の村づくりは、時代的にみて明治初期のわが国では産業革命がまさにじまろうとした時期にあった。坂本によってつくられた千屋村づくりの構図は、①各集落の真中にあたる一丈木地区を核とし、ここに公園をつくる。そして、②この中心地から各集落に向けて6本の並木道を放射状に配置する。③公園の周辺には、役場、郵便局、病院、公民館、警察所、小学校などの公共施設を置く。④各集落のまわりには、整備された田畑が広がっている。⑤資金面では、中心地とした一丈木、耕地整理された土地、さらに、建設費などの費用は、ほとんど坂本の私財で賄われており、千屋村負担は人夫代程度といわれている。現在、⑥千畑村の人口は約9000人であり、農業が主である。(図-3参照)

坂本とハワードの最大の類似点としては、人間愛に基づく地域社会づくりをあげることができ、ともに、豊かな安定した住民の生活空間の確保を計画の最終目標としている。また、構図上の類似点も多い。両者のプランの共通したレイアウトは、計画地の中心に公園をつくり、その周辺に役場(市役所)、郵便局、病院などの公共施設を配置し、中心地と各集落(又は住宅地)を6本の放射状の並木道で結ぶ。また、各集落(又は住宅地)は、中心地から等距離に位置し、そのまわりには、田や畑、林を配置していることである。このような配置の共通点は、住民の公共施設利用に対する地域的な平等を図ることにあったと思われる。

両者のプランの基本的相違点として、両者の社会的・時代的背景をあげることができよう。すなわち、明治の末期(1900年前後)の日本と英国では、政治、文化、経済などあらゆる面において、格段の相違があり、地域社会づくりに対する社会的ニーズにも違いがみられる。それは、ハワードが劣悪な居住環境の改善として、田園性の追求、低密度、近隣住居をその特徴としているのに対し、坂本は農業の安定経済を図るための耕地整理事業の一環として村づくりを行なったところにあらわれている。さらに、建設規模の大小にも関係するが、建設資金の調達方法にも大きな相違がみられることである。

図-5 ハワードの田園都市

(原図: 参考文献.11) P18)



4. むすび

約80年前、英国でエベニザ・ハワードが、日本で坂本理一郎が、お互いに独自の発想で理想の町づくり、村づくり計画を行なった。両者のプランに共通する点はいくつかみられるが、最大の相違点は、建設思想のその後の伝承であろう。ハワードの田園都市論は、自国英国のみならず、その後のわが国はじめ欧米各国のニュータウン計画に大きな影響を与えたのに対し、坂本の村づくりプランは東北の一寒村千畑村に、一丈木公園、6本の松・杉・桜並木道など昔のおもかげを残すだけである。

我々が都市計画を立案する際、諸外国での成功例

を参考にすることが多い。しかし、それはまた、気候、風土、習慣、生活様式、言葉、宗教観など異なる他国の国情に合致したもので、我国で受け入れ難い諸点のあることも認識しておかなければならない。そのため、我国特有の町づくり、村づくりの先駆をさぐり、研究し、理解しておくことが重要であると考えられる。坂本の千屋村プランは、そのひとつにあげられる貴重な業績であろう。

なお、本報告をまとめるにあたり、資料収集等で多大な御協力をいただいた千畑村役場、千畑村公民館、秋田県仙北農林事務所の関係各位に、深く感謝する次第である。

(参考文献)

- 1) 「日本地誌・3」 二宮書店 P494、P605 昭和53年6月第2刷
- 2) 「千畑村の統計」 秋田県仙北郡千畑村 昭和58年3月
- 3) 「わがまち わがむら100指標」 秋田県情報統計課編 昭和57年3月
- 4) 「農村計画と農村教育」 茨城県田園都市協会 昭和56年3月
- 5) 「千畑村は美しく」 秋田県仙北郡千畑村役場 昭和55年3月
- 6) 「秋田県人名事典」 秋田魁新報社 P192～193 昭和49年8月
- 7) 後松州造 「髣髴の発達」 千畑村史
- 8) 「真比留」一創立百周年記念誌一 秋田県仙北郡千畑村立千屋小学校 昭和55年12月
- 9) 清水浩志郎 「英国のニュータウンにおける交通計画」 日本都市学会年報第16巻 P262～265 昭和58年1月
- 10) E・ハワード 「明日の田園都市」 鹿島出版会 昭和55年2月第10版
- 11) John Moss-Eccardt 「EBENEZER HOWARD」 Shire Publications Ltd. P15～24 1973年